

編集後記

今年度も 3 年生の演習における成果を無事まとめることができた。関係各位に心からお礼申し上げる。

心理学の実験演習や実験を伴うゼミ活動を担当していると、理論的な側面をどのように指導するのかが気になってくる。たいていの場合、実際に実験を行うのがはじめての学生に対しては、手続き的な側面の指導に集中しがちである。そもそもデータを集めること自体がはじめてであるし、材料を準備して適切に配置し、定められた方式で実施するなど、やるべきことも多い。その後も、集めたデータに対して統計的な分析を行い、なじみのない心理学の報告書式に沿ってレポートを執筆しなければならない。勢い抽象的で高度な理論面への注目は教員も学生もおろそかになりがちである。

しかし、手続き的な側面にばかり注意を向けてしまうと、それが実験であるという誤解を招くことになる。つまり、定められた手続きに沿って行ったら何とかがなされたと考えてしまうのである。それが極端になると、何らかの変数を操作して手続き的に問題のないと思われる実験を行ったら研究をなしえたと思ひこむことになる。もちろん、研究目的に照らして意味のない操作をしても有意義な知見が得られることはない。目的よりも手段が先行すると目的を通り過ぎて研究の意義も見過ごされるということである。

いったん手技を身につけたならば、それが何のためのものであるかを今一度問わなければならない。厳格な手続きが求められるのはそのような手段を通してはじめて、期待するようなデータが得られる見込みが立つからである。しかし、何を期待しているのかが明確でなければデータから明確な知見を得ることはできない。ここで改めて自分が問われるのであり、思えばそれこそが文字通りに学問ということではないだろうか。

2024 年 3 月 11 日

大正大学心理社会学部人間科学科

井関 龍太

r_iseki@mail.tais.ac.jp